

昔語り

新潟のだんごまきという風習は、江戸時代ごろに始まったと伝えられる。誰が、なぜ始めたのかはつきりしないが、語り継がれるいくつかの話がある。

お釈迦さまが入滅した後、遺骨を弟子たちが各地域に持ち帰り、丁重に供養したことになぞらえたとするものや、お釈迦さまが涅槃に入られる前、弟子たちが食べやすいようにと、だんごを一口大にしてさしあげたことに由来するというものなど、いくつか伝承されている。

レシビ

人びとはこのだんごのことを「涅槃だんご」とか「智慧だんご」などと呼んでいる。実に様々な作り方がある。もち米やうるち米、上新粉などを使用し、大きさは一口大ではあるが、厳密に決まっているわけではない。お釈迦さまの舍利が五色または七色に輝いたという逸話があり、それに基づき一つひとつのだんごに色付けをしているところや、またお釈迦さまの背骨の形になるように作っているという話もある。特殊な例としては、その年の干支を型取っただんごを数個から数十個作って混ぜるところもあるという。

法要の日が近くなると、地域の人はお米をお寺に寄進して、だんごを作る。実際に筆者も住職を務める寺で作ったことがあるが、上新粉をこねて一口大に仕上げるまで、本当に骨が折れる。しかし、だんご作りから参加する人は一様に、「お釈迦さまのお骨と同じものになるのだから」とか「手にとった人に喜んでもらえるように」と言いながら、一つひとつ出来上がりの形にこだわり、真剣に毎年取り組んでいる。作り方や仕上がりはそれぞれだが、どこもお釈迦さまの舍利に見立て作るとは共通している。

法要とお守り

法要はまず、涅槃図像（掛け軸）を掲げて、その御前にだんごをお供えする。そして住職が『舍利礼文』や『仏遺教経』などを読経する。この読経によって、だんごはお釈迦さまの舍利と同じ功德の詰まったものになると考えられている。その後、お釈迦さまのご生涯を振り返る紙芝居や法話などをして、いよいよ威勢良くだんごを撒く。参加者は歓声をあげながら競って拾うのだ。子供たちが嬉しそうに拾う姿は、なんとも微笑ましい光景である。

法要後には、その年の無病息災や五穀豊穰などを願って食される。また持ち歩くことで、交通安全などの厄除けになるとも信仰されている。中には、自分でキーホルダーのように細工して、毎年カバンに付け替えているという人もいる。また、家の中に害虫が入ってくることも多い季節には、玄関先や自室に祀って、害虫よけとされているという。

春風

昔から、この地方の多くの寺では、月遅れで涅槃会（今の三月一五日）を営んでいる。大雪の時期を避けるというのが最大の理由である。また、この頃には「涅槃西」という春風が吹き、その風は農耕開始の合図と考えられてきた。農耕を営む人びとが、供えただんごにお釈迦さまの功德を



だんごまき（長岡妙圓寺、筆者撮影）

であった。

悲しいかな。私は釈尊亡きあとに生まれ、そのお姿を拝
 することができません。これは、今の煩惱の世に生きる
 私の、悔しきであります⁽³⁾。

自身が釈尊在世に生まれ得なかつたことは、明恵の最大の苦しみである。
 ここに、父母を亡くした悲しみが一層の拍車を掛けており、悲嘆のすべては釈
 尊そのものへ向けられていたと解してよい。

いかにして釈尊と値遇するか。
 しかし、生身の釈尊はそこにいない。出逢いは不確実なものとしてとらえるほ
 かになかつた。

どうすればよいのか。

明恵はこの問題の解決に「聖教の修学」を挙げ、聖教を「仏の形見」とし、
 「仏に代わる存在」と観ていた。これによって必ずや仏果を証し、過去の釈尊を
 「現在・未来」につながる、法身のすがたとして昇華していった。

まことに、我らは一心にこの仏陀の教えをたもつて、近くは現在の如来生身

のかたみとして、遠くは未来の見仏間法のちぎりを結ぶでしよう。また、す
 べての菩薩の修行する位におよぶ諸の功徳を備えて、必ず如来の真妙法身を
 証することでしょう⁽⁴⁾。

十八歳のとき、明恵はじめて『遺教経』を目にする。

『遺教経』は、釈尊がクシナガラの娑羅双樹下で、涅槃に入る直前に遺された最
 後の教えである。明恵はじかの釈尊の教説として、重く受け取っていた。文字が
 極悪の經典であっても、常に経袋に納めて持経としていたほどであり、釈尊の遺
 法を聖教(經典)に求めていたことがわかる。否、明恵の中では遺法というよりも、
 釈尊へ値遇するそのものとなっていた。

この経は、「わたくし」成弁⁽⁵⁾が生年十八の歳、ひとり西
 山の閑室に籠居して、数部の古経の中からこの経を求め
 得ました。「釈尊が」入滅されてから二千年の末にあつ
 て、はじめて經典の扉を開いたのです。悲喜相交わり、
 涙を抑えることができません。その後、ひたすらにこれ
 を持誦するところ、文字は極悪であつても、最初に得た
 經典ですので、経袋の中に「大切に」納めております⁽⁶⁾。



和歌山県有田川町にある明恵生誕の碑



明恵誕生地に建つ石卒塔婆
 (康永3年(1344)建立)

(4) 『華嚴唯心義』(高山寺典籍文
 書の研究) 七六六頁参照。

(5) 明恵の名。三十六歳から高弁。
 (6) 高山寺蔵『遺教経』奥書(中野
 達慧「明恵上人と其師資(其一)」
 『密教研究』四二、一九三二年) 二八
 頁。引用は意訳。

(3) 『華嚴唯心義』(高山寺典籍文
 書の研究) 高山寺資料叢書別巻、東
 京大学出版会、一九八〇年) 七六三
 頁参照。

れたとき、わたしたち三人の女友達は、精舎の献納を行ないました。⁽²³⁾
 釈尊の生には前例があり、釈尊は第四あるいは第七の仏であると考えられ、信
 仰されるようになる。過去仏がそうであったように、釈尊もトウシタ天から最後
 の生を享けるのである。

毘婆尸世尊…尸棄世尊…毘舍婆世尊…拘樓孫世尊…拘那含世尊…迦葉世尊…
 世に出現し給えり。…今、我…は世に現れたり。⁽²⁴⁾

毘婆尸菩薩は兜率天より降り、正念にて自覚して母胎に入りぬ。これかかる
 所の常法なり。⁽²⁵⁾

と説明されていて、釈尊の出現は過去仏の例にならったもので、こういう出現の
 仕方は真理(ダンマター、常法)であると解釈されている。

こういう考えがいつごろから流布し始めたかは、明確には決定しがたい。過去
 七仏が図像として表現された古い例は、サーンチーとパールフトに見ることがで
 きる。サーンチーにはアシヨーカーカ王柱があることから、第一塔の原形はアシヨ
 カ王(在位、紀元前二七三〜二三二)の時代に遡るとされる。⁽²⁶⁾過去七仏の彫刻(樹木
 で表現されている)は塔に付属する塔門に彫られている。⁽²⁷⁾塔門の建立はストウパー
 より後で、紀元後一世紀初頭とする説が有力であるという。パールフトの例につ
 いては、サーンチーより古いとされるが、「一般にはBC一五〇年頃とされている
 が、浮彫彫刻の様式からBC一〇〇年以前には遡らないとする説も有力である」⁽²⁸⁾

という。

以上の例から見るかぎり、過去七仏の伝承が定着してくるのは紀元前後となろ
 うが、過去七仏の信仰が広まる以前には過去四仏に対する信仰が存在していたと
 考えられるので、アシヨーカーカ王の時代では四仏の信仰であったといえる。アシヨ
 ーカーカ王の建立した石柱に注目してみよう。先に見たように、過去四仏中の第二の
 コーナーカマナに関する石柱は現存する。第四が釈尊であるので、これはルンビ
 ニーに存在する(ブッダ・サキヤムニと刻まれる)。しかし他の第一、第三に関する
 ものは現存しない。しかし七世紀にインドを巡礼した玄
 奘の記録によると、第一のカクサンダ(クラクチャンダ)
 仏が誕生した城がカピラヴァストウの南五〇余里にあ
 り、その跡に遺身舍利を祀った塔があつて、その前に三
 〇余尺の石柱があつたという。⁽²⁹⁾第三のカツサパ(カーシ
 ュヤパ)仏については、全身舍利の塔はあるとするが、
 石柱については記述がない。

玄奘より二三〇年前にインドを巡った法顕は、過去三
 仏を記念した塔が建っているとするが、石柱に関しては
 一切言及しない。法顕が述べる石柱は、サンカーシヤ、
 コーサラ、ヴァイシャーリー、パータリプトラの四ヶ所



サーンチーの仏塔の東側塔門(裏)にみられる過去七仏(最上段、拡大写真) *The Monuments of Sāñchi* 1982 より

(23) 中村元訳『尼僧の告白—テリ
 ーガーター—』(岩波文庫、一九八二
 年)九七頁(詩節番号五一八)。

(24) 南伝大蔵経六(大本経)、三六
 二頁。過去七仏のパーリ語読みは以
 下のとおり。ヴィパツシン、シキン、
 ヴェツサプー、カクサンダ、コーナ
 ーガマナ、カツサパ、サキヤムニ。
 (25) 同前、三七三頁。

(26) 宮治昭『インド美術史』(吉川
 弘文館、一九八一年)四〇頁。
 (27) Sir John Marshall, Alfred
 oucher: *The Monuments of Sāñchi*,
 Delhi 1982, vol. II, pl. IX.

(28) 宮治前掲書、二八頁。

(29) 水谷真成訳『大唐西域記』(平
 凡社、一九七一年)一九五頁。

(30) 同前、一九二頁。

(31) 長澤和俊訳注『法顕伝』(雄山
 閣、一九九六年)六四頁。